



羅針盤

塩原 哲夫
Tetsuo Shiohara

杏林大学医学部皮膚科 教授
Visual Dermatology 編集委員



秩序の崩壊がもたらすもの

昔、小学校のわがクラスには、奇妙なルールがあった。校則を守らず宿題もやってこない者を反権力の英雄と褒めそやす一方で、教師の言うことを聞いて規則を守ろうとする者をイヤな奴として糾弾した。しかし、このような奇妙なルールはほかのクラスや学校には拡大せず、全国の小学校はこのような奇妙なルールに支配されることはなかった。

それから10年がたち、再びこれに似たルールがわれわれの大学を支配するようになった。教員をつるし上げ、授業料値上げに反対し、産学共同研究を糾弾する行為をくり返す、いわゆる学園紛争の時代に突入したのである。何かあれば学生は大学をバリケード封鎖し、大衆団交と称して塾長を皆の前にひきずり出し、拷問に等しい口撃をくり返す。可哀想なのは教員たちで、学生の怒号を一身に浴びることになる。これをマスコミがもてはやし、日本、いや世界の大学は荒れに荒れた。おかげで、この時代に青春を過ごしたわれわれは、上からの圧力をはね返し、自分たちの正当性を声高に語るこそ素晴らしいことだと考えるようになったのである。いわゆる団塊の世代である。

しかし、さしもの学園紛争の嵐もやがて収まり、今の大学は平穏で、このような気配すら感じられない。21世紀も15年が過ぎ、多くの団塊の世代は大学を去ろうとしている。学生運動には参加も共感もしなかった筆者(ノンポリと呼ばれた)からみると、あれは決してよい時代ではなかったと今さらながら思う。

皮膚科とは関係のない話を延々と書いてきたのには理由がある。小学校のわがクラスの奇妙なルールが拡大していかなかったのは、小学校のなかには良識ある秩序が保たれていたからである。保護者らもそんな子どものルールを声高に支持したり、秩序を壊したりしようとはしなかった。こういう状況では、小さなクラスの反乱は些細なできごととして片づけられていく。つまり、これは皮膚の一部(わがクラス)でおこった小さな炎症が消褪していく過程とみなすこともできよう。それに対して、10年後におこった学園紛争の嵐では、もはや秩序は失われ、それを止める術すら見出せない。あたかも山火事のように次々に広がり、人々は呆然とするだけで、なんら手を打つことすらできなかった。まさしく全身に広がった炎症状態である。

小学校での小さな反乱も大学時代の学園紛争も、その表現形は異なるように見えるが、“秩序の崩壊”という視点で考えると両者は共通している。局所の秩序がある程度保たれていれば、全身に拡大することなく局所の炎症で収束していくし、全身の秩序が乱れていると、いたるところから火の手が上がり、全身の炎症(学園紛争)に広がっていく。つまり、局所あるいは全身の秩序を守る機構の破綻こそが、局所あるいは全身性の疾患につながるのではないかという考えなのである。

本特集号は、皮膚型が全身型に移行しうるか、移行するとしたら、そこにはどんな因子が関与しているかを明らかにしたいという願いで始まった。